

第一編 先史時代

まえがき

紫波町地域（以下当地域という）の歴史が文献の上で明らかになってくるのは、奈良時代も末期になってからのことである。従って、それ以前の時代は、文献史料が全く存在しない時代であり、一般にはこれを先史時代と称している。それは、数千年かあるいはそれ以上に及ぶ悠久の時代であった。

それでは、この時代、当地域に住んでいた人々の生活と文化はどのようなものであったろうか。これを明らかにすることはきわめて至難であるが、しかし、それでも、考古学の知見をおしてその片鱗だけは知ることができる。

その考古学の立場からすると、この時代の大部分は、石器時代と呼ばれる時代である。すなわち、石製の利器や器具を使用して原始的な生活を営んだ時代であるが、考古学では、この石器時代を更に旧石器時代と新石器時代に大別するのが普通である。旧石器と新石器とは、製作技術の上でかなりの相違がみられるが、それよりも両者を大きく区別するものは、旧石器は地質学という洪積世時代の人々が製作したもの、新石器は沖積世時代の人々が製作したものとされている点である。従って、層位的には、赤土層から出土する石器を旧石器、黒土層から出土する石器を新石器とする方法がとられている。また、旧石器時代の石器が主として打製、つまり石を打ち欠いて作ったものに対し、新石器時代のそれは磨製石器であり、更に土器も使用されるようになるのが特徴である。

ところで、従来、日本の石器時代は新石器時代から始まったというのが通説であった。しかし、そのなかにあつ

て、少数の学者の間では、日本にも旧石器時代が存在したのではないか、という予測のもとに、それを確かめるための調査と研究がすすめられてきた。その結果、今日では、旧石器時代の可能性のある遺跡は確実なものだけでも百カ所以上に及び、その分布は九州から北海道まで全国にわたるに至った。岩手県でも、和賀仙人遺跡・花泉獣骨遺跡・岩泉洞窟などから、旧石器時代のものと同定される石器が発見されている。それゆえ、当地域においても、旧石器時代の存在する可能性は十分あるわけであるが、しかし、現在のところこれを確定づける遺跡が発見されていないため、本史では、旧石器時代についてはこれ以上言及しないことにする。

新石器時代になると、人類の文化は著しい進歩をとげたが、日本ではその発達段階を土器の発達を中心として縄文時代と弥生時代とに区分するのが普通である。縄文時代は、狩猟と漁撈を中心とした採取経済の時代であったが、この時代にも、ある時期から原始農業が行なわれたとする説が多くの人々によって主張されている。それが弥生時代になると、稲作りを中心とする農耕文化に発展するようになり、一部では金属器も使用されるようになった。て、人々の生活は次第に安定をみるようになった。

かくして、石器時代は終末を告げることとなるが、その後に続く古墳時代になると、鉄器の使用が一般的となり服飾品も多くなり、仿製鏡（大陸の形式をまねて作った鏡）も作られ、土器も土師器と称される無文のものに統一されるようになって、文化の内容は更に充実を見るようになった。

当地域においても、縄文・弥生・古墳と三時代にわたっての遺跡が各地に存在しており、大局的には日本の他地方と同様な発展過程をたどったことを示している。ただ、弥生時代以降になると、東北地方全般がそうであるように西日本に比較するとかなりの後進性がみられるようになってくる。特に、その傾向は古墳時代において著しく、当地域の古墳は畿内地方のものより年代がおくれて、ほとんどが終末期に属すると考えられている。これは、大陸文化の影響を受けて北九州や近畿地方に発達した弥生式ないしは古墳文化が、東北地方に普及してくるまでの時間的な

ずれによるものであろう。このころになると、中央の人々は、東北地方を僻地視するようになり、その住民を「蝦夷」の卑称で呼ぶようになるが、その根底には、政治的な意図のほかに、この時間的ずれからくる文化の後進性もあずかつていたと考えられる。

蝦夷をどのように解するかについては、従来、学者の間で多くの論争が繰返されてきた。その代表的なものあげると、まず、歴史学者の喜田貞吉や言語学者の金田一京助は、現在のアイヌの祖先であるという説を唱えた。すなわち、異民族説である。これに対して、人類学者の長谷部言人^{はせべことんど}や歴史学者の田名網広^{たなあみひろ}等は、蝦夷は日本民族であるが、辺境に住んでいたために文化におくれ、生活状態が近畿地方とは著しく違っていたので、中央の貴族から異民族のようにあつかわれたに過ぎない、と主張している。また、伊藤信雄のように、蝦夷とは中央政權に服属しない人々に対する支那的表現である、とみている学者もある。この外にも異説があつて容易には定説をみないが、いづれにしても、東北地方を「壘陬僻地」^{ばんすうへきち}と表現していることでも明らかのように、当時の貴族たちは、この地を僻地視していたことは確かであるから、蝦夷の概念の中には、卑称的な属性を含んでいたことは否定できないであろう。

次に、この時代を縄文時代・弥生時代・古墳時代の三つに分けて、大要を述べることにする。

第一章 縄文時代

第一節 縄文式土器の概要

縄文時代になると、石斧・石鏃・石槍・石匙・石錐・石棒・石剣・石皿などと石器の種類も多くなってくるが、しかし、なんといつても、此の時代の文化を代表するものは、縄文式と呼ばれる土器である。

縄文式土器の名は、土器の表面に縄目の文様が多く残されているところから生じたものであるが、しかし、全時代を通じてこの縄文だけが施されたというのではなく、時代の経過と共に、各種の文様がくふうされて、著しく変化と発達のとをみせている。このことは、器形や製作技術の上でも同様であるが、考古学では、これらによって類似した一群の型式を設定し、これを年代順に配列して編年をきめる研究が積み重ねられてきた。その結果、今日では、関東地方では五十に及ぶ型式が判明しているし、隣接の宮城県や青森県でもおよそ三十型式が発表されている。しかして、考古学では、これらの型式を早期・前期・中期・後期・晩期の五期に区分して編年するのが普通である。

早期の土器は、底のところがたつた深鉢形が特徴であり、一般に尖底土器の名で呼ばれている。縄文の施文はまだ発達せず、岩手県においては、アカガイのような二枚貝のふち（鋸歯状のもの）を土器面に圧して施した貝殻文が多くみられる。

前期になると、土器の底部は平底（輪積み法による）となり、器面には各種の縄文が施されるようになってく

る。その文様には各種があるが、東日本では、あつじょうもん 庄縄文（なわをそのまま土器面に回転させながらおしつけたもの）とよりいともん 捩糸文（なわを軸に巻きつけたものを回転させたもの）が多い。岩手県においては、岩手郡付近（盛岡市を含む）を接触地帯として、南部と北部とでは形や文様等の上で相違がみられるが、南部のものは宮城県大木町遺跡出土の土器を標準形式として大木式土器と呼び、北部のものはその形の上から円筒式土器と称している。

中期になると、厚手の大形土器が作られるようになり、土器面に粘土紐ひもを張りつけた雄渾こんな隆起線文が発達し、立体的な装飾が加えられるようになる。岩手県においては、前半は前期に引続いて南部・北部の差がみられるが、中ごろになるとその相違がなくなり、土器の上では一様の文化が行き渡った形勢にある。また、後半になると、縄文の地文を沈線で囲って他の部分をすり消す方法（磨消縄文）が発達し、土器も中ごろのような大形なものも少なくなってくる。

後期になると、土器の作りは一般に薄手となり、中期末に行なわれた磨消縄文の手法が著しく発達し、さまざまな沈線で囲まれた文様が施されるようになる。ことに、筥状工具へちまの先端を使用してつけた沈刻の直線や曲線を自由に用いて種々の文様を描き、時には縄文の地文を全く欠いて沈線だけのものもある。また、磨消手法の発達によって土器面を調整することも盛んとなり、光沢を帯びている土器さえも現われるようになった。器形も鉢形・かめ形・わん形・土びん形・つぼ形・高杯たかつき・漏斗形ろうと・カップ形と種類が多くなり、注口土器や台付き土器も作られるようになった。

晩期の土器の代表としては、青森県西津軽郡木造町きづくり亀が岡出土の土器形式によって、亀が岡式土器と呼ばれるものがある。その精巧なものは、薄手作りで土質や焼成も良好であり、小形の黒褐色を帯びたものが多い。器面の調整は著しく進歩し、全面を研磨した無文のものもあるが、一般には雲形文を浮き出させたものに特徴があり、後には工字文が多くなってくる。中には溜状小突起りゅうじょうやすかし穴を施し、彩色等も加わった優秀な土器もある。器形は後期

より更に多くなり、すかし彫りの香炉形土器（とうろ）さえ作られている。このように、亀が岡式土器は、石器時代としては最高度に発達したものであるが、その出土状況からみて、東北地方を中心に発達したものと考えられている。

それでは、縄文式土器の製作はいつごろから始まり、いつごろ終末を告げたのであろうか。戦前の日本の考古学では、縄文式土器の初頭期を今から五、六千年以前とみるのが普通であった。ところが、戦後になると、放射性炭素による年代測定法（一九四七年に、アメリカのシカゴ大学の原子科学者F・リビーによって発明）が日本の考古学にも利用されるようになり、その結果、杉原莊介（しょうげ）や芹沢長介（せりざわ）によって、初期の縄文式土器は約一万年前に起こった、とする新説がうちたてられるようになった。しかし、これとても定説となっていないわけではなく、山内清男（やまのちずお）のよう、約五千年前を主張してまっこうから対立している学者もある。いずれ、今後の研究にまつべき問題である。一方、終末の年代については、西暦紀元前二、三世紀ごろ（約二千二百年前）とするのがほぼ一致した見解となっている。すなわち、弥生式土器の開発年代がこのころと推定されることから、縄文式土器の終末もおおむねこの時期であろうと考えられているのである。ただし、これは南関東から西日本にかけての年代であって、東北地方の場合は、土器型式の上で若干の時間的ずれがみられるところから、終末年代も約二千年前位かあるいはそれ以下にまで下るのではないかとみられている。（注一）

注

一、草間俊一・吉田義昭著『考古学提要』

第二節 紫波町内の縄文遺跡

従来、当地域における縄文遺跡の調査は、表面採集がおもで、学術的な発掘調査はほとんど行なわれなかった。



図1-1 縄文中期土器
(升沢字田屋出土)

一 西部地区の縄文遺跡

そのため、現在のところ、出土品の編年時期が明らかなのは、中期・後期・晩期の三期だけであり、早期と前期のものについてはまだ確認されていない。しかし、それだからといって、早期・前期にあたる時期には人類が住んでいなかった、と断定することは早計である。既に、岩手県においても、気仙・大船渡・東磐井・胆沢・水沢・和賀・盛岡・岩手・二戸・九戸・宮古・上閉伊の各都市から早期のものが出土しているし、近接地の盛岡地方のごときは、下厨川大館堤・大館・宿田・山岸(屠牛場・歳の神・日向)・浅岸八十田とかなり広範にわたって分布している状況であるから、当地域にあっても、存在の可能性が全然ないとはいいたくないからである。このことは、前期のものについてもまた同様である。今後の学術的な発掘調査の結果に待ちたい。

ともあれ、現在知られている当地域の縄文遺跡は百カ所以上にも及んでいるが、これを西部・中部・東部の三区に分けて掲げると表1-1のとおりである。以下、その概要について述べることにする。

西部地区の縄文遺跡は、立地の上から、山間部・山麓部・平地部の三つに分けてみるとことができる。

山間部の遺跡としては、山王海盆地と上平高地の二カ所が知られている。双方とも中期の土器破片が出土しており、早くから人間が居住していたことを証している。

山麓部の遺跡は、水分扇状地を中心とした南北の山すそと上平高地を巡る山すそ各地に分布している。中でも水分扇状地と片寄の漆立遺跡は、土器破片の出土規模(量と面積)が大きく、か



図1-2 縄文晩期土器（赤石小学校蔵）

なりの集落があった形跡がみられる。水分扇状地の遺跡からは、開墾の際（昭和二十年ごろ）、炉跡や石造遺構らしいものが出土したといわれているが、正式には確認されていない。

平地部の遺跡は、山麓部に接続した洪積台地と滝名川氾濫原上の河岸段丘や微高地に分布し、三系列のうちでは最も遺跡の数が多し。そのうちでも代表的なもの、升沢の極楽寺東部から田屋にかけての遺跡である。この遺跡は、沖積低地に接続した洪積台地上にあるが、中・後期の土器破片や石斧・石鏃・石棒・石匙等の石器類が一带にわたって出土しており、土隅も発見されている。

一一 中部地区の縄文遺跡

中部地区の縄文遺跡は、城山や陣が岡の孤立丘、洪積台地の東端部、北上川氾濫原上の河岸段丘・自然堤防・微高地等に分布している。そのうち、遺物散布の規模が大きいのは、城山から吉兵衛館と善念寺山を経て北七久保に至る一連の小丘陵地帯である。ここは土地が高燥な上、外敵に対する防禦もしやすく、住居地としては好適な条件にあったのであろう。これに次いで、箱清水・蔭沼・犬淵の台地でも、比較的広範にわたって遺物の散布がみられる。また、甘木の下河原遺跡からも、開田工事の際に大量の土器破片が出土したといわれている。

一二 東部地区の縄文遺跡

東部地区の縄文遺跡の中には、北上川氾濫原に接続した洪積台地上に立地しているものもあるが、大部分は北

西部地区	地区
土館字大岩ノ目(下屋敷) 土館字馬ノ子(新山ゴルフ場)	所在地名
中期・後期	時期
西部地区	地区
土館字和山	所在地名
後期	時期

表一—一 紫波町地域の縄文遺跡



図1—3 縄文晩期土器(百沢洞窟出土)

上山地西端部の佐比内川・赤沢川・益成川・山屋川などの流域に分布している。中でも、規模の大きいのは、佐比内字中屋敷の代官畑遺跡であり、台地の頂部から東斜面一帯にわたって中・後期の土器破片が散布しているし、上部からは炉跡も発見されている。この外では、大巻の花立・犬吠森の間木沢・遠山の新坊・小深田等の諸遺跡も散布範囲が広い。また、船久保の百沢遺跡は、県下でも数少ない洞窟遺跡の一つとして知られているが、ここからは後・晩期の土器や石器が発見されている。

第1章 縄文時代

中 部 地 区										西部地区	
<p>宮手字北田 陣方岡字幅 陣方岡字平坊 中島字落合(古館駅付近) 高水寺字向畑 二日町字栗木田 二日町字北七久保 二日町字古館 二日町字向山 日詰字石田 日詰字牡丹野 平沢字松田 北日詰字外谷地 北日詰字城内 南日詰字箱清水 南日詰字蔭沼</p>										<p>宮手字作岡 宮手字泉屋敷</p>	
<p>後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期 後期・晚期</p>										<p>後期 後期</p>	
東 部 地 区								中 部 地 区			
<p>遠山字小深田 遠山字新坊 紫野字外野 船久保字百沢(百沢洞窟) 山屋字山口(別当) 山屋字山口(山寺) 山屋字下崎 東長岡字上大平 東長岡字林崎 東長岡字天王 栃内字横沢目 栃内字沢田 江柄字手造 北沢字松原</p>								<p>南日詰字甘木<small>はたぎ</small> 犬淵字南谷地 犬淵字下越田 片寄字越田</p>			
<p>後期 後期 後期 後期・晚期 中期・後期 中期・後期 後期 後期 後期 後期 後期 後期 後期 後期 後期 後期 後期 後期 後期 後期 後期</p>								<p>後期・晚期 後期 中期・後期 中期・後期 後期・晚期 後期・晚期</p>			

東 部 地 区	地 区	所 在 地 名	時 期
大巻字長沢尻	後期	遠山字廻田	後期
大巻字花立(高金寺東)	中期・後期	遠山字西野々	後期
犬吠森字間木沢	後期・晚期	北田字堀田沢	後期
犬吠森字沼端(笹森社東)	後期	赤沢字判官堂	後期
赤沢字曹畑	中期・後期	赤沢字大内渡	中期・後期
赤沢字杉町	後期	赤沢字田中	後期
赤沢字岡田	後期	赤沢字岡田	後期
東 部 地 区	地 区	所 在 地 名	時 期
佐比内字黒森	後期	彦部字暮坪(彦部小学校敷地)	中期・後期
佐比内字神田	後期	彦部字暮坪(赤坂)	後期
佐比内字中沢(ぼんどう坂)	後期	彦部字竹原(白山)	中期・後期
佐比内字中沢(だんのはな)	後期	佐比内字中平	後期
佐比内字僧が沢	後期	佐比内字中平	後期
佐比内字片山	後期	佐比内字平栗	後期
佐比内字中屋敷(代官畑)	中期・後期		

第三節 生活の概要

縄文時代の人々は、自然物の採取だけに依存して生活を営んでいた。従って、その食糧事情は、環境の変化に左右されてきわめて不安定なものであったに違いない。ことにも、東北地方のような積雪寒冷地においてはなお更のこ

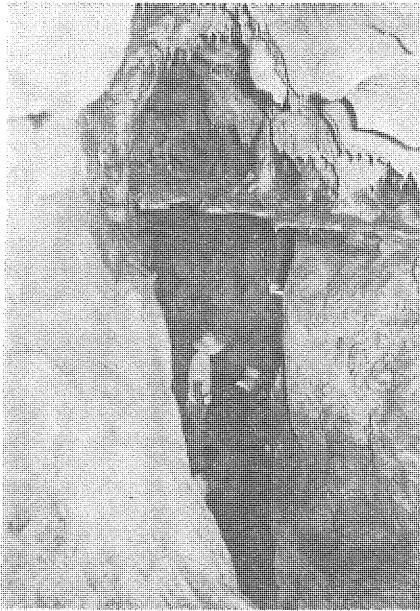


図1-4 船久保百沢洞窟

とである。そこで、多量に採取できて、しかも、ある程度の貯蔵にたえる食糧が考えられてこなければならぬ。この条件に適するものとして、植物ではクリ・トチ・ナラ・クヌギなどの木の実や多年生の芋類（山芋・ところ・ほど芋・長芋・里芋）は早くから利用されたであろうし、動物ではサケ・マスのの冷凍や燻製くんなども行なわれたであろう。東北地方においては、このようなことを前提としない限り、冬季の生存は到底理解されないのである。ともあれ、百カ所を越える縄文遺跡が存在するという事実からみても、東西の背後に北上・奥羽の山地をひかえ、その間に北上川とその支流をかかえた当地域は、食糧資源の面でかなり恵まれた条件にあったものと考えられるのである。なお、この時代の後半には、原始農業が始まったとみる学者もあるが、しかし、定説となるには至っていない。可能性は十分考えてよいのであろう。

この時代の住居形式には、^{たてあな}竪穴住居・平地住居・自然洞窟住居等がある。このうちでも、竪穴住居は最も一般的な形式であるが、これは、径四、五メートルの地面を円形ないし方形に掘りくぼめ、中に四本から六本の柱を立ててその上に屋根をふくという構造のものである。これに対して平地住居は、地面を掘りさげることなく、地表面を直接住居の場とするもので、中には自然石を敷きつめて床としているものもある。当地域においては、学術的な発掘調査がほとんど行なわれていないため、この種の住居跡として確認されているものは一つもない現状であり、洞窟住居跡にあってもわずかに船久保ふねくぼの百沢洞窟が知ら

れているに過ぎない。しかし、遺物の散布状況や規模からみて、各地に住居群のあつたことが推測されるし、これを通して集落の存在を考えることができる。

このようにして、縄文時代の生活は、数千年もの長い間、原始的な段階から抜けきることができなかつた。ただ同じようなことを何回も繰返すことによる熟練があり、経験を重ねることによる知識の進歩があつたから、これらの積み重ねによつて、きわめてゆるやかではあつたが発展の過程はあつた。このことは、さきに述べた土器の器形や文様の変化、遺跡の拡大等を通してでも推知することができる。また、自然に依存した採取経済のもとでは、人々の間に貧富の差の生ずる要因はまず考えられないし、住居跡や服飾品の研究を通して、これを証するようなものは認められていない。このことから、縄文時代の社会は、貧富の差や階級差のない平等的な社会であつたと考えられている。

第二章 弥生時代

第一節 弥生式土器の概要

西暦紀元前二、三世紀(約二千二百年前)のころになると、縄文式土器とは全く別な新しい土器の製作が大陸から伝わってきた。この土器は、焼成が縄文式土器よりも良好で、八百度から千度位で焼かれたものと考えられているが、明治十七年(一八八四)、東京の本郷弥生町の貝塚から最初に発見されたところから弥生式土器と呼ばれるようになった。

この土器の製作技術は、まず最初に西日本に伝わり、それから漸次東日本にも波及するという伝播過程をたどったが、その間に東日本の縄文式土器は著しく発達をみていたため、その伝統が弥生式土器の上にも強く引継がれる結果となった。すなわち、縄文式土器の継続として晩期の文様が多く施されている。このことは、岩手県の弥生式土器にあっても同様である。

弥生式土器の実年代については、遺跡から併出する大陸製の銅鏡類を手がかりとして、前期は紀元前三世紀から前一世紀まで、中期は紀元前一世紀から一世紀まで、後期は一世紀から三世紀までと、おおよその推定が行なわれている。^(注一)しかし、これは、北九州を中心とする西日本の年代区分であって、前述のように伝播時期のおくれをもつ東北地方に、そのまま適用するわけにはいかない。それでは、東北地方ではどうかという点、別に定説があるわけではないが、一般には、中期には仙台付近まで、後期には青森まで伝播したとする見方がなされている。^(注二)これに他の見解を加えて考えると、東北地方の始期は、南部では一世紀ごろ、北部では三世紀ごろと、おおよその見当をつけることができそうである。とすれば、岩手県では二世紀前後ということになるか。

注

一、二、井上光貞「石器時代の日本」『日本の歴史』

三、岩手県編『岩手県史』第1巻

第二節 紫波町内の弥生遺跡

当地域の弥生遺跡としては、現在のところ高水寺字田中、下松本字元地、小屋敷字焼野、小屋敷字新在家、片寄字大明神、船久保字百沢の六遺跡が知られるに過ぎない。



図1—5 弥生式土器（高水寺字田中出土）

高水寺の田中遺跡（古館農業協同組合西部の水田）の土器は、亀が岡式終末期の文様をうけついで孤文または工字文で描いた磨消縄文を特色とするもので、宮城県多賀城町榎形^{ますながたかこい}貝塚の土器を標式とする「榎形閉式」と類似している。^(注二)

下松本の元地遺跡（古屋敷北側の水田）からは、平行沈線の下部にコ字形連繫文かと思われる文様を配した小破片と無文の口縁部破片が発見された。なお、この遺跡からは、土師器や須恵器の破片もかなり多量に出土している。^(注二)

小屋敷の焼野遺跡（通称狐沢）の土器は、大洞^{おおぼら}A式に該当するものであり、中には動物の顔か人面らしいものをつけたものもある。^(注二)

同じ小屋敷地内の新在家遺跡（水分水道貯水場付近）は、水分扇状地のほぼ中央部に立地しているが、ここから出土する土器の破片には、太い沈線で変形工字文をかいたものがあり、またそれに竹管の突刺文を配したものもある。このような竹管文は、盛岡市浅岸の八木田遺跡から出土するものにもあり、関東北部の古い弥生式土器の施文法とも共通する点があるとされている。^(注三)

片寄の大明神遺跡（漆立の北西）からは、榎形閉式と類似のものが出土している。なお、この遺跡の西方には、近接して縄文後・晩期の遺跡や土師^{はじ}・須恵器^{すえ}の遺跡があり、長期にわたる住居地として注目される。

船久保の百沢^{ももざわ}遺跡から、縄文後・晩期の土器が出土したことは既に述べたが、このほか、ここから採集された土器破片中に、細線文系列の弥生式土器のあることが報告されている。^(注四)

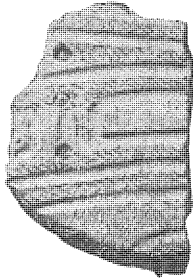


図1—6 弥生式土器 破片
(小屋敷字新在家出土)

第三節 生活の概要

注
一、紺野博夫稿『紫波町の縄文文化』

二、四、岩手県編『岩手県史』第1巻

弥生式文化の最大の特徴は、稲作農業が行なわれたことにある。このことは、弥生式土器に稲粒の圧痕が認められることや、弥生式土器といっしょに稲粒の炭化したものや稲の収穫に使用された石包丁^{ほうちょう}が出土することによって明確である。しかし、東北地方の北部においても、本県の水沢市佐倉河常盤広からは稲粒の圧痕がある弥生式土器が発見されているし、青森県南津軽郡田舎館村からも稲粒圧痕のある弥生式土器と共に炭化したものが出土していることからみて、既にこの時代から水稲耕作の行なわれていたことは事実であろう。ただ、品種改良のなされないこの時代に、寒冷地の東北地方において、どの程度まで普及したかは問題である。おそらく、本県のごときは、稲作といっても、局地的でしかも試作の域を出ない段階ではなかったろうか。県内から収穫用の石包丁が発見されないのも、なにかこのへんの事情を物語っているようにも思われる。いずれ、土器製作の上では弥生式の影響を強く受けながらも、生業の面では、依然として自然物の採取が大きな比重を占めていたとみてほぼ間違いがなからう。

これらのことを当地域の遺跡の上からみると、高水寺・下松本両遺跡の場合、沖積低地に立地して水田耕作との関連を思わせるものがあるが、その他の遺跡においては、山地や山麓^{さんろく}に立地して自然物に依存する度合いの方がより強

く感じられる。つまり、立地上からみる限りにおいては、水稲耕作の開始も否定できないが、大勢としては、前時代に引き続いて採取生活が主体をなしていたと想定されるのである。

弥生式文化のもう一つの特色は、金属器が使用されるようになったことである。すなわち、この時代には、石包丁（鎌として使用）や石斧・石剣等の石器も作られたが、そのほかに、青銅で作った銅鐸どうたくとか銅劍・銅鉞どうげんが使用され、後期になると鉄製の道具も用いられるようになった。しかし、岩手県においては、これらの金属器はまだ発見されていない。このことは、金属器の伝播がまだ本県にまで及ばなかったか、もし使用されたとしてもごく少数でしかなかったことを物語るものであろう。その背景には、伝播過程の距離的・時間的な問題もあるが、それと共に、水稲農業が未成熟であったため、まだ金属器を導入するだけの階級が出現しなかったことによるのではなからうか。

要するに、この時代の当地域は、東北地方の北部全体がそうであるように、弥生式土器の製作技術はようやく普及をみたものの、その他の面では、前時代の伝統を濃厚に引き継ぐという、いわば過渡期的な段階にあったとみることができよう。

第三章 古墳時代

第一節 古墳文化の概要

弥生式文化に続いて、大陸からつぎつぎと新しい文化が伝来し、日本の文化は発展していった。ことに、鉄で作ったすぐれた武器が伝わり、一般に用いられるようになったが、その結果、周囲の人々を征服してその支配下に入

第3章 古墳時代

れながら、各地に有力な豪族が出現するようになった。そして、更にこれらの豪族を支配して、日本を統一する勢力さえ現われるようになった。これが大和朝廷である。この政治的な変化は、支配する者と支配される者との差別を生み、更に、その支配者に使役される奴隷までも生ずるようになった。

この豪族や政治的支配者が出現した結果、それらの人々を葬るのに、高い土盛りをした大規模な墳墓が築造されるようになった。それゆえ、この時代を古墳時代と称されている。

この時代になると、弥生式土器に代わって土師器及び須恵器と呼ばれる土器が製作されるようになった。土師器は、弥生式土器の製作技術を継承する素焼きの無文土器で、土師部（土器の製作を職掌とする部民）が製作に関係したところからこの名が生じた。須恵器は、ろくろを使用して製作した陶質の土器で、その製作技術は、六世紀の初頭ごろ、大陸方面から伝わったと考えられている。岩手県から出土する土師器は、初めのものは巻き上げ法や輪積法によって作られているが、後になるとろくろが使用されるようになってきている。このろくろ使用の土師器は、須恵器と伴出することが多い。須恵器の伝来に伴ってろくろの使用が一般に普及してくると、これが土師器の製作にも適用されるようになったのであろう。

ところで、古墳の築造は、三世紀の後半ごろから近畿地方を中心として発達し、漸次東北地方へも波及してきたが、岩手県においては、前期のものはまだ見当たらず、中期のものも現在のところ胆沢郡胆沢村南都田の角塚前方後円墳が知られている程度で、大部分は後期のものである。すなわち、実年代でいうと、ほとんどが奈良時代（七一〇～七九四）かそれより若干さか上るころのものと考えられている。^(注一)しかし、土師器においては、五、六世紀のものが確認されているから、既にこのころから古墳文化の影響下にはいったとみてよいのであろう。いうならば、古墳のない古墳時代の時期があったわけである。それゆえ、岩手県の時代設定においては、古墳時代というよりもむしろ土師器時代といった方が妥当である、という見解もあるほどである。^(注二)ただ、土師器は、須恵器と共に平泉藤原氏の時

代になっても使用されているから、厳密な意味での土師器時代は、先史時代から歴史時代にまで及ぶわけである。そのため、本史では、あえて古墳時代と称することにした。

注

一、草間俊一『盛岡市史』第一分冊

二、伊藤信雄『弥生式文化時代とその遺跡』『岩手の文化財』

第二節 紫波町内の古墳文化遺跡

一 古墳遺跡（推定）

当地域の古墳については、学術的な発掘調査が全然行なわれていないため、明確なことはわからないというのが実情である。しかし、それであっても、里人による発掘や実地踏査の結果、古墳と推定されるものが少なくない。これをまとめると表一―二のようであるが、この中には、後世の墳墓や経塚の類がないとは限らない。たとえば、南日詰字箱清水の通称蛇じやの塚は、従来、後期の古墳と考えられてきたが、昭和九年に郷倉（備荒用の倉庫）敷地として破壊した際、経筒が出土したというから、実は経塚であったと考えられるごときである。

さて、これらの分布状況を見ると、西部山麓やまづくの系列、中央台地の系列、東部山地西縁部の系列の三つに大別でき、それぞれに系列には、古墳群とも称すべき分布の濃密地帯が一カ所ずつある。

西部においては、片寄の大明神から黄金堂こがねどうにかけての古墳群がそれであり、安部道あべみちと称される古道にそうて八基が知られている。すなわち、大明神の俗に「ふんだて」と称される段丘上には、高さ一・五メートルほどの円墳が三基ある。また、これに隣接した松林中にも三基が認められるが、これは封土が崩れて低くなっているため、形態は判然としない。これより北の方、旧黄金堂の堂宇があった直下に、高さ二メートルほどの円墳が一基ある。これは、

かつて、里人によって発掘されたが、その際、内部に石塊が使用された痕跡がみられ、前方と中央部に木炭が詰められて、その中に人骨があったという。^(注一)この外、猿倉坂の上り口の南側にも一基あるが、これも封土が崩れて形態は判然としない。

中央部においては、二日町の古墳群がそれである。すなわち、同地の南部から西部にかけての台地をめぐる、山子^{やまこ}に二基、善念寺山に一基、栗木田^{くりのまた}に一基の計四基が知られている。共に径一・二メートル、高さ三、四十センチメートル前後の小円墳である。山子のそれは、里人の間に「掘るべからず」といい伝えられてきたものであるが、十数年前、古館小学校の児童がひそかにその一つを発掘したところ、中から骨片がでたという。栗木田のものも過去において発掘されたが、それによると、五、六個の石の間に粘土をつめた「石柳様^{せつりょう}」のものがあつた、その中に人骨と木炭を入れたものらしく、上に葺石^{ふきいし}がのせてあつたという。^(注二)

東部では、佐比内字中屋敷の七つ盛古墳群^{ももり}がある。これは、俗に代官畑と称される台地の上部に散在する古墳群で、その名のごとく大小七つの円墳があり、大きいものは径三メートル、高さ六十センチメートルほどである。別に「いたこ塚」とも称されている。

この外、単独で存在するものには、升沢字小森・宮手字陣が岡・土館字備後沢・土館字浦田・枋内字横沢目・彦部字暮坪の古墳がある。小森のものは、東西十メートル前後、南北約四メートル、高さ二メートルほどのものである。陣が岡のそれは、蜂神社の裏側にある径二・五メートル、高さ五十センチメートルほどの円墳で俗に「王子盛^{もり}」と呼ばれ、「蜂子王子^{はちこ}」の墳墓という俗説がある。浦田のものは、俗に「だんこ」と呼ばれる台地の上部にあつた、径約六メートル、高さ一メートル内外の円墳である。横沢目の俗称「だんながね」(壇長根か)の山林中にある古墳は、東西十三メートル、南北六メートルほどの長楕円形で、高さは一・五メートルほどある。「いたこ塚」と称されている。暮坪のものは、赤坂の台地上にあつて、径五メートル、高さ一・三メートルほどの円墳であつた

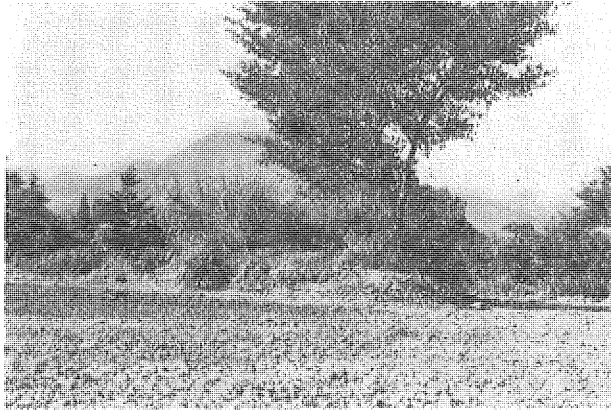


図1-7 浦田古墳(推定)

二 土師器・須恵器遺跡

当地域における土師・須恵器の出土地はきわめて多く、その分布もほとんど全地域にわたっている。このうち、おもなものを掲げると表一―三のとおりであるが、これ以外にも、土地改良事業等の際に出土をみたと報ぜられている個所が少なくない。

が、開田の際に破壊されて原形をとどめない。備後沢の古墳は、山王海ダムの建設に伴って水没したが、原形はそのままである。

表一―二 紫波町内の古墳所在地

所在地名	備考
土館字備後沢(森子)	山王海ダムによつて水没
土館字浦田(だんこ)	六基ある。
片寄字大明神(ふんだて)	
片寄字小山沢(旧黄金堂)	
片寄字猿土(猿倉坂入口)	
升沢字小森(森子)	
宮手字陣が岡(蜂神社)	
二日町字山子	二基の内一基破却
二日町字北七久保(善念寺山)	破却
二日町字栗木田(杉の上)	破却
佐比内字中屋敷(代官畑)	七基ある。
彦部字暮坪(赤坂)	破却
栃内字横沢目(だんながね)	

これらの中には、古墳時代のものだけでなく、開拓時代以降のものも含まれており、数的にはむしろ後者の方が多いとさえ考えられるが、しかし、両者を判然と区別することは至難である。それゆえ、ここでは、区別を加えることなく、一括して掲げることとした。

土師・須恵器の中には、往々にして墨書銘や篋書銘(らがき)のあるものがあるが、当地域においても、土館字金田・同字内川・二日町の三カ所から墨書銘のあるものが発見されている。すなわち、土館の通称金田館からは、土師器(坏)と須恵器(碗形)の二つが出土しているが、共に糸切底で、前者には「卒」の文字が墨書されているし、後者は口辺部の外面に塗料が施され「石」の文字が書かれている。内川から出土したものは、糸切底の土師器(坏)で、墨書文字は「傀」に似ている。二日町出土のものも土師器(坏)であるが、その外面から口辺部の内面にかけて朱の塗彩が認められ、「本」の文字が墨書されている。(注三)

なお、遺跡の大部分は、土器の出土状況からみて、住居跡であった公算が大であるが、ほとんどが耕地化して乱掘されているため、構造等を確認することは至難である。

表一—三 紫波町内の土師器・須恵器出土地

出 土 地 名	器 種	出 土 地 名	器 種
南伝法寺字沢口	土師器・須恵器	上松本字柳屋敷	土師器・須恵器
南伝法寺字中屋敷	同	上松本字荒屋敷	同
南伝法寺字両沼	同	上松本字五反田	須恵器
小屋敷字昼場	同	升沢字田中	土師器・須恵器
小屋敷字焼野	同	升沢字久保	同

第3章 古墳時代

三 焼 窯 遺 跡

土師器や須恵器の製作に伴って、それを焼成するための窯の発達がみられるようになった。すなわち、平窯や登り窯の出現がそれである。特に登り窯が設けられるようになること、千度以上の高温で焼くことができるようになり、須恵器のような良質の土器が出来るようになった。

当地域においては、その遺跡はまだ確認されていないが、それでもほぼ確実とみられるものが二例ある。

その一つは、二日町字栗木田の通称杉の上（河岸段丘の東縁）にある。この遺跡は、大正十三年五月に地元の人小川勝郎によって発見され、その後、菅野義之助が实地調査をして発表されたものであるが、焼土・木灰・木炭末と共に多数の土師器・須恵器の破片が出土したと報告されているから、焼窯遺跡であることはまず間違いないからう。傾斜地に立地していることや須恵器が出土している点からみて、登り窯の可能性が強く考えられる。

出 土 地 名	種 器	出 土 地 名	種 器
北日詰字城内 南日詰字箱清水 南日詰字小路口 南日詰字大銀 江柄字手造 東長岡字林崎 北田字桜田	土師器・須恵器 同 同 同 同 同 同	赤沢字的場 大巻字間田 彦部字機織 彦部字久保 彦部字小深田 佐比内字山崎	土師器 土師器・須恵器 同 同 同 同



図1-8 焼窯遺跡（二日町字栗木田）

他の一つは、南日詰字箱清水（薬師神社西側）にある。ここは、乱掘りによって現況は不整となっているが、かつては、幅約三メートル、長さ九メートル前後の地面上に、人工の傾斜地が形成されていた形跡がある。その一部は、往年、地元民によって発掘されたが、その際、多量の焼土に混じって木炭末や土師器・須恵器の破片が出土したという。もとより、本格的な発掘調査によるものではないからにわかに断定するわけにはいかないが、この周辺から土師器や須恵器がかなり豊富に出土していることを合わせ考えると、登り窯の存在を想定してもさほど無理がないように思われる。

以上の二例は、時代的には次の開拓時代に属するものであるが、記述の都合上ここで述べることにした。

四 鉄 刀 類

岩手県の古墳や堅穴遺跡からは、蕨手刀^{わらびてとう}・方頭大刀^{たち}・直刀などの鉄刀類がかなり多く出土しているが、当地域においても、次の三例が知

られている。

中島字樋口（古館駅南東の水田）からは、土師器にまじって蕨手刀二口が出土している。いずれも先端部は欠損していたが、そのうちの一口は、残存部の全長四十五・六センチメートル、柄長十一・五センチメートルと計測されている。^{（注五）}



図1-9 方頭大刀（赤沢字行人平出土）

日詰字石田（北上川堤防付近）からも、蕨手刀一口が発見されている。これは、北上川の堤防工事の際、日詰小学校の児童が発見し、同校教諭工藤隼人によって確認されたものであるが、現物が見当たらないため詳細は知りがたい。発見場所の状態からみて、工事用の土と共に他から運搬されてきたことも考えられる。^(注六)

赤沢字行人平^{（ぎょうにんたいら）}（行人平家の裏側畑）からは、方頭大刀一口が出土している。これも先端部が欠損しているが、残存部の全長は三十六センチメートル、柄長は十五・四センチメートルほどである。奈良時代のものとされている。^(注七)

第三節 生活の概要

前時代においては、稲作農業はまだ試作の域を出なかつたと考えられるが、それがこの時代になると、次第に生業化の方向をたどつたことはや疑う余地がない。このことは、土器の出土遺跡と、などによつて容易に推知することができる。すなわち、稲作農業の進行にともなつて、住居は次第に耕作に便よい低湿地やその周辺に移行するようになったであろうし、生産規模の大小や余剰農産物の多少をめぐつてようやく貧富の差が生ずるようになり、これが次第に拡大して、やがては古墳や鉄刀類で表現されるような富豪階級の発生をみるに至つたのであろう。しかし、それであつても、大勢はまだ自然物の採取から脱却するまでには至らず、いわば半農半採取的な段階にあつたのではないかと思われる。

一方、農耕生活への転換は、必然的に人々の定住を促すこととなり、やがて農耕中心の集落が形成されるように

なったであろうし、更には、生産性を増大していく過程を通して、村落内の集団が一つの共同体として結合していったことも当然であろう。また、これに伴って、最初は村落の有力者が代表的な立場で共同体を統一していったであろうが、それが次第に固定化してくるようになると、やがては集団の支配者として絶対的な権力をもつようになつたのであろう。こうして、部落国家的な支配形態が成熟をみるようになり、更には、これらの連合体さえも成立をみていたのではないかと思われる。この時代の終末期になると、志波^{しは}地方の原住民たちは、胆沢の人々と並んで、強大な勢力を形成するようになり、ために中央政權でも征討の必要を感じるほどであったが（詳細は後述）、このことは、今述べたような過程を前提としない限り、容易には理解しがたいところである。

ところで、さきにも述べたように、この時代になると、中央の貴族たちは、東北地方を僻地^{へきち}視して、その住民を蝦夷^{えみち}の卑称で呼ぶようになった。そのため、当時の東北人を異民族とみる説さえ唱えられたほどである。しかしながら、今までみてきたことから明らかなように、東北人といえども、文化階梯^{かいてい}の上では、中央人と全く同一の段階を経過してなら異るところがなかったのである。ただ、新しい文化が伝播^{でんぱ}してくるまでの時間的なずれのあったことだけは事実である。ことに、採取経済から農業経済への転換期においては、気候上の制約からかなりの停滞があつたことは否定できないであろう。ここに、東北地方の後進性が生まれてくる大きな要因があつたと考えられるのである。

この後進性は、同時に開拓の可能性を意味するものであつた。ここにおいて、東北地方は、農業開発の可能地帯として、中央政權の注目をあびることとなつたのである。しかし、この開拓事業は、七世紀の後半から開始され、この時代の終末期（八世紀後半）にはほぼ宮城県の北辺にまで進行した。やがて、岩手県にも、国家資本による本格的な開発の時がやってくるのである。

注

- 一、小笠原謙吉「紫波郡における古墳」『岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告』第三号
- 二、『右同』第二号
- 三、小岩末治「岩手における土師式文化考」『岩手史学研
究』二十一号
- 四、岩手県教育会紫波郡部会編『紫波郡誌』
- 五、昭和二十六年春、土地改良工事の際に発見されたもの
で、一口は古館小学校、一口は花巻北高等学校に保管
されていたが、現在はいずれも紛失してしまった。
- 六、日詰小学校に保管されていたというが、現在は見当
たらない。
- 七、小岩末治『大墓公と悪路王』



弥生式文化の生活（『盛岡今と昔』より）

